



わが子ケネディ

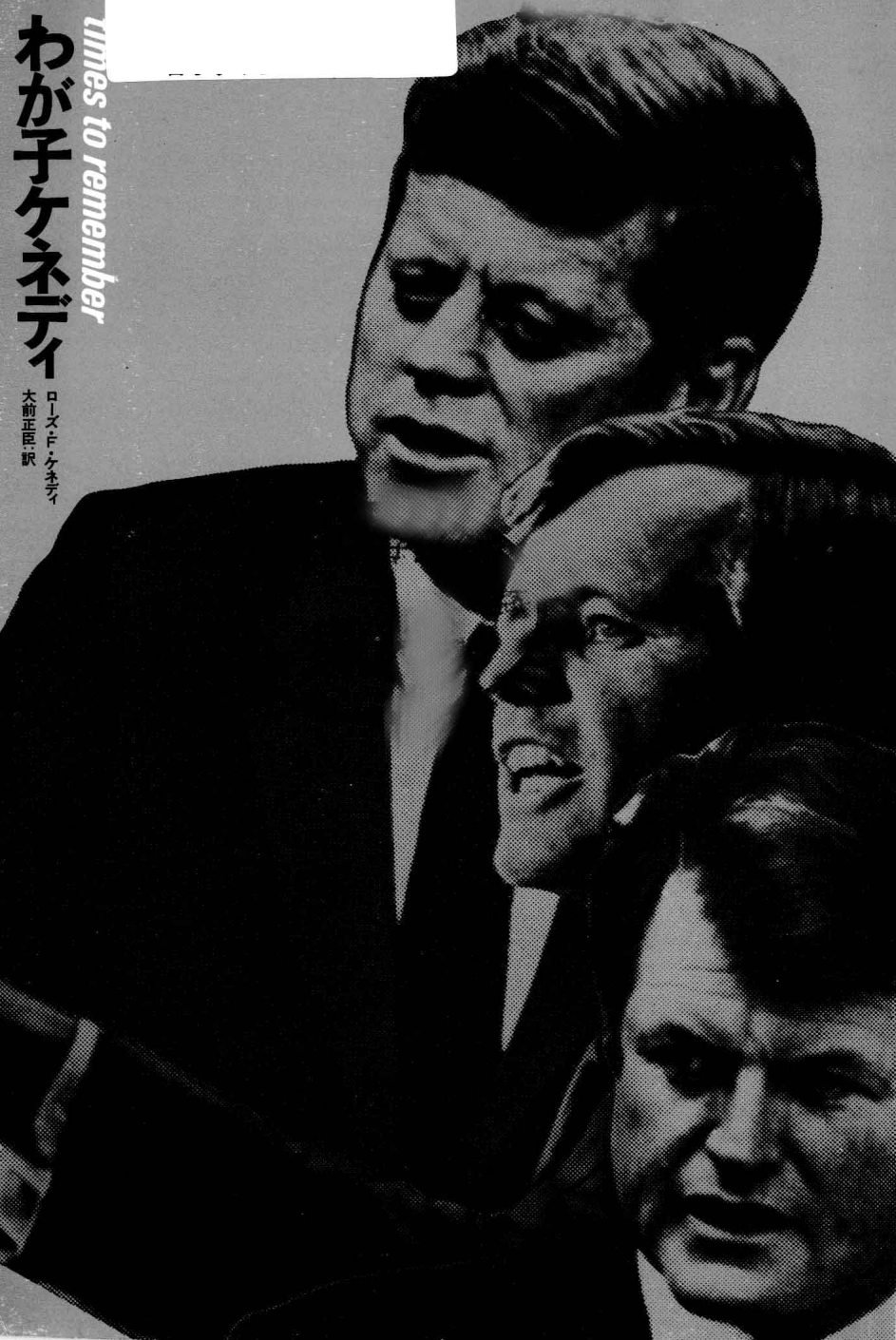
ローズ・ケネディ
大前正臣 訳



times to remember

わが子ケネディ

ローズ・F・ケネディ
大前正臣訳



大前正臣（おおまえ・まさおみ）

1923年、岐阜県に生まれる。東京大学文学部卒業。米国コロンビア大学留学。東京新聞外報部記者をへて、現在、評論、翻訳に従事。

〈主な著作〉

『英米のマスコミ』（研究社）、『ニクソンを売る』（日経新書）、ソレンセン『ケネディの道』（訳書 弘文堂）、『暗殺』（訳書 読売新聞社）、エドワード・ケネディ『70年代への決意』（訳書 徳間書店）

わが子ケネディ（*Times to Remember*）

昭和49年 5月15日 初刷

昭和49年 7月20日 8刷

著 者 ローズ・F・ケネディ

訳 者 大 前 正 臣

発行者 徳 間 康 快

東京都港区新橋 4-10

印刷／図書印刷株式会社

製本／ナショナル製本

東京都港区新橋 4-10
発行所 TEL 東京(433)6231 株式 徳 間 書 店
振替 東京 44392 会社

落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします。Printed in Japan

この本を、わが娘ローズメリーと、彼女のように知能は遅れているが、心は恵みを受けている全世界の人びとに捧げる。私は、知能の遅れが克服され、もはや精神障害者の母親たちとともに嘆く必要はなく、健康で幸福な若者の親たちとともによろこび合う世界を夢みる。その世界が実現されて初めて「私はよく闘った。道程を終えた。信仰を守った」といった聖パウロの言葉を語ることができよう。

天が下のよろずの事には季節があり、すべてのわざには時がある。

生まるるに時があり、死ぬるに時があり、

植えるに時があり、植えたるものを抜くに時があり、

殺すに時があり、医やすに時があり、

こわすに時があり、建てるに時があり、

泣くに時があり、笑うに時があり、

悲しむに時があり、踊るに時があり、

石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、

抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、

捜すに時があり、失なうに時があり、

保つに時があり、捨てるに時があり、

裂くに時があり、縫うに時があり、

黙るに時があり、語るに時があり

わたしは知っている。人にはその生きながらえている間、楽しく愉快に過ごすよりほかに良い事は

ない。またすべての人が食い飲みし、そのすべての労苦によって楽しみを得ることは神の賜物である。……

それで、わたしは見た、人はその働きによって楽しむにこした事はない。これが彼に分だからである。だれが彼をつれていって、その後の、どうなるかを見させることができようか。〔伝道の書〕

「伝道の書」は旧約聖書中、私の好きな部分である。私の息子、故ジョン・F・ケネディ大統領もそうであった。右の箇所は一九六三年の彼の国葬の際、朗読された。

ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ

訳者まえがき

ケネディ兄弟の母親、ローズ・ケネディ夫人——といっても読者にピンとこないかもしれない。兄弟やその夫人が、よきにつけ、悪しきにつけ、華やかな話題の主人公になってきたのに、母親はそうかげに隠れ、あまり目立たない存在だったからである。

しかし母親として、彼女ほど悲しい目にあつた女性も少ないだろう。九人産んだ子供のうち、四人が悲業な最期を遂げている。長男は戦死し、次男、三男がともに暗殺者の手に斃れ、次女も飛行機事故で死んでいる。次女の婿も戦死した。ついでに言えば長女が精薄者として施設に収容されている。

一方、現代の母親として、彼女ほど栄光に満ちた女性もまれだろう。次男が米国大統領、三男が実力閣僚の司法長官、四男が上院議員と、息子たちがみな国家最高のポストについた時代を経験している。それに生残った唯一の男性、四男エドワードもそれほど遠くない将来、米国大統領の座につく可能性が強い。幾多の批判、そねみを受けながらも、ケネディ家はいまなお現代米国で、最も光輝に満ちた家柄である。

この最高の悲劇と最高の栄光を一身に味わつたローズ・ケネディ夫人がこんど初めて自分の教養な運命の思い出を一書にまとめた。ここに訳出した『わが子ケネディ』がそれである。

ケネディ大統領が殺されてから、一家および兄弟について書かれた本は全世界で数百冊にのぼると

いう。私も三冊、翻訳している。しかし本書はそのなかで特別の意義を持つと思う。なぜならばケネディ家の一員が自ら一家について書いた本格的な本はこれがはじめてだからである。

しかも著者が母親として、この卓越した子供たちをいかに育て、しつけ、教えたかを本書ではじめて詳しく公表しているからである。また、後年、息子たちが国家指導者に育ってゆくよこび、それが次つぎに殺されてゆく悲しみを、母親として生なましく物語っているからである。

夫人はきたる七月、八十四歳になる。しかし、これは決して「老いのたわごと」ではない。一読されればわかるが、著者は若いときからつけてきた日記、メモをもとにし、さらにそれを関係者が保管してきた手紙と証言で裏付けながら、本書を実にしっかりした回想録に仕あげた。

本書を書くにいたった動機は、世間に流布されている一家の「真相」にはひどいウソもあるので、それを訂正したかったからだという。

それにあたって、著者はいまさら隠し立てする年ごろでないと、自分が体験した事実、そのときに抱いた感情をありのままに語っている。輝ける一家に一人の精薄者を持った苦しみ、大統領になった次男の子供時代の腕白ぶりと無精ぶりが多い。思わず、しんみりさせたり、ほほえまされるエピソード

夫人の年齢からみて、本書にうかがわれる彼女の記憶力、知力、意志力はまことに驚嘆に値する。ケネディ兄弟に及ぼした父親の感化力はいく知られているが、母親の内面的感化はそれ以上のものがあつたろう。この子にして、この母ありと思わせる。それはわが国を含め、今日の社会に失われた魂を持つ懐しい母性像でもある。読者は彼女を通じ、ケネディ家という現代米国のきわめてユニークな一家の真髄に触れられるであらう。

本書の原文はかなり膨大にわたるので、アメリカ人読者にしか興味がないと思われる項末な部分は端折ったことをお断りしておく。同時に日本人読者には説明不十分と思われる点もあるので、次にケネディ家の社会的背景を略述したい。

ケネディ家は百年前、米国に渡ったアイルランド人移民の子孫である。筆者は三世に当たる。

アイルランドは長年にわたって英国に統治されたが、米国に渡ったアイルランド人移民も、古くからの移民のアングロ・サクソン系に差別待遇されてきた。

とくにボストン地方はアイルランドから距離的に近かったため、ここに多くの移民が住みついたが、前からのアングロ・サクソン系市民と、あとからきたアイル系の市民との二つの社会が形成され、アイル系はことごとくに差別された。彼らはアングロ・サクソン系から「飲んだくれの怠け者」というイメージを持たされ、求人広告でも「アイルはお断り」と露骨に排斥されるありさまであった。

このアイル系社会で成功者となったケネディ家の二世と、著者の実家であるフィッツジェラルド家の二世はともに政治的実力者となり、差別待遇撤廃に闘った。ケネディ家がいまでもあまり酒を飲まないのも、アイル系は「飲んだくれ」というイメージを一掃しようとした二世時代の伝統である。

アイル系は差別待遇の撤廃をじょじょにかち取っていった。著者の父はアイル系として初めて、ボストン市長に当選した。また筆者の夫で、故大統領の父親のジョゼフ・P・ケネディは金づくりがうまく、映画、造船、銀行、証券など各種の事業に投資し、禁酒令解禁前にスコッチ・ウィスキーを大量に輸入するなどして、一代で米国有数の財閥にのしあがった。彼はまたフランクリン・ルーズベル

ト大統領と親しく、初代の証券委員長に任じられ、ついで第二次大戦前に駐英大使も勤めた。

しかし最高の差別撤廃は大統領になることである。著者の夫はその夢を四人の男の子に託した。が、最大の障害が残っていた。それはアイル系のほとんどがそうだが、一家がローマ・カトリック教徒であることであった。

米国は宗教的迫害を逃れた英国人の移民がつくった国であり、伝統的に新教徒が主流を占めている。カトリック教徒はあとから渡った移民の子孫が多く、社会的にも経済的にも一段と低く見られていた。人口からみても新教徒の七千万に対し、ローマ・カトリック教徒は四千七百万にすぎない。

それにローマ・カトリック教会はバチカンを頂点とする超国家的な一大組織なので、精神的には個人の独立、政治的には欧州からの独立を本能的に尊重する米国の新教徒にはカトリックの大統領を戴くことはアメリカの伝統的精神にもとると思われていた。したがってカトリックは大統領になれないと不文律のように信じられていた。一九二八年、カトリック教徒のアル・スミスが民主党候補として大統領選に出馬したが、カトリックであるがために大敗している。アイゼンハワーまで米国大統領は一貫して新教徒であった。

ケネディ家の次男ジョンの大統領選出馬はこのタブーに挑戦したことであった。それがどんなに苦しかったかは母親が本書で回想していることに知られよう。ケネディ家は見事、タブーを打破ることに成功した。それは皮肉なことにカトリック系、アイル系に特徴的な大家族のチームワークの賜物だったともいえよう。それとともにケネディの大統領当選は米国社会全般における民族的、宗教的に少数派の差別撤廃と地位向上に新しい道を開いた。その結果は目を見はらせるものがある。アイル系はいまや完全に主流派になった。七二年大統領選で、ポーランド人移民の子孫でカトリックのエドマン

ド・マスキーが有力候補となったように、もはやカトリックであることはホワイトハウスの道への最大障害にならない。

このような好ましい変化をもたらしたのも、肉体と知力と意志力に恵まれた新しく若いケネディ家が、米国社会の偏見と因習に対して行なった果敢な挑戦だったといえる。その挑戦で一家の母親がどのように重大な役割を果たしたかは本書で知られよう。もし、殺されるまでの危険をおかしても息子を大統領にしたかったのか、と反問する読者がいるとしたら、彼女は「イージーな生活を送るより、可能性のギリギリを追求するのがわが家の精神」と、あくまで前方をみつめながら、答えるにちがいない。

なお一家の居住地と家族の構成が複雑なので、ここに整理してみよう。

一家は初めボストン郊外のブルックラインに住み、ついで父親の仕事の都合で、ニューヨーク郊外のブロンクスビルに移転した。さらにケープ・コッドのハイアニス・ポートに移り、現在にいたっているが、暖いフロリダのバーム・ビーチにも家を持ち、冬は避寒している。ハイアニス・ポートには別に故大統領、故ロバート、四男エドワードのそれぞれの家もある。

九人の子供は次の通り。本書ではほとんど愛称で呼ばれているので、■カッコ内に愛称もいれた。

長男・故ジョゼフ（ジョー、第二次大戦で戦死）

次男・故ジョン（ジャック、大統領、ダラスで暗殺される。未亡人はジャクリーン、愛称ジャッキ

ー）

長女・ローズメリー（精薄者で、ウィスコンシンクの修道院に収容されている）

次女・故キャスリーン（キック、飛行機事故で死ぬ。彼女の夫、英国の貴族ハーティントン侯爵も第二次大戦で戦死）

三女ユーニス（サージェント・シュライパーと結婚。同氏はケネディ政権時代の平和部隊長官、元駐仏大使、七二年大統領選では民主党の副大統領候補）

四女・パトリシア（パット、英国人俳優ピーター・ローフォードと結婚、のちに離婚）

三男・故ロバート（ボビーないしボブ、元司法長官、上院議員。六八年民主党大統領予備選に出馬中、ロサンゼルスで暗殺される。未亡人はイーセル）

五女・ジーン（のちにケネディ家の財産管理人となったスチーブ・スミスと結婚）

四男・エドワード（テディないしテッド、上院議員。夫人はジーン）

最後に本書の翻訳をすすめられ、編集と製作を担当された徳間書店書籍編集部の方々にあつくお礼を申しあげたい。

一九七四年三月

訳者

わが子ケネディ
へ目次

訳者まえがき——4

はじめに——17

序章 娘時代

家系の特徴——23

ケネディ家との出会い——29

初恋の人ジョー・ケネディ——34

ケネディ家の悲鳴

母乳で育てる——42

九人の子供のファイル・カード——46

私の円卓教育

食事時間を守らせる——50

食卓での「教育ゲーム」——55

気をつけて！——60

天性の読書家ジャック——65

九人の子供たち

行動には責任を——72

ジャックは金に無関心——76

兄と弟——79

九人目の子供——86

躰はきびしく

シツケとスケジュール——93

父の贈物——98

長女ローズメリー——106

私の信仰——111

手におえないジャック

ジョーの英国留学——116

ジャックの寮生活——123

「クズ・クラブ」——128

最後の夏

最後の家族団欒——135

キックの結婚——139

最初の死——145

政界へ

兄の遺志——152

上院に挑戦——158

ジャッキーとの結婚——164

大統領への道

勝利への団結——171

やっかいな「カトリック問題」——179

テレビ討論に祈る——184

大統領就任式——188

大統領の母の席順——195

夫、倒れる——201

デディの嫁ジョーン——202

運命の日

ダラスその日——209

報告——213